太田市立太田小学校　校長室から　１４号　平成３１年２月１３日（水）

「養身有為」

ようしんゆうい

丈夫な体をつくり、常に勉学を怠らず、
世のため人のために役立つ、実行力のある人になろう

「他との比較ではなく、自分の心に残る取り組みを・・・」

～卒業・修了まで、あと一ヶ月～

６年生の卒業式まで３７日(含 土日)、１～５年生の修了式まで４１日(含 土日)となりました。

新しい年が始まり、どの児童も「今年も頑張ろう」と思ったに違いありません。しかし、一ヶ月半が過ぎ、その「頑張る」をどう考えているのでしょうか。

実は、私は小学生、中学生の頃「頑張る」ことが、どうも苦手な少年でした。きっかけは、小学生の頃「みんな頑張っているんだから、おまえも負けないように頑張りなさい」と言われたことでした。そう言われた私は、根拠がない考えから、「僕が頑張れば、今度は友達が『負けないように…』頑張る。すると僕は、もっと頑張らなければならない。それはエンドレスだ」という、浅い考えが頭をよぎってしまったからです。

ところが、最近読んだ本の対談記事では、この感情は、「頑張る」ことが仕事である、あの競馬のサラブレッドでさえ抱くことなのだそうです。

その記事には、こんな内容が書かれていました。

昔、「マリノスター」という馬がいたそうです。素晴らしい血統に生まれながら、競争意識が全くなく、デビュー戦で大差のビリで負けて以来、多くの負けを繰り返したそうです。
戦況を勝手に判断して、どう頑張っても無理だと感じたら、騎手がいくら鞭（ﾑﾁ）を入れても走らなかったそうです。
ただ、サラブレッドの勝てない結果は、当然、後に肉にされる最期が待つばかり。しかし、「マリノスター」はやはり頭が良く、「今生の別れに」と水の代わりに酒を持ってきた厩務員を目の当たりにして、自分が危ない状況に気づくわけです。
その後は、目付きを一変させて、どうしても外に出せとアピールし、やっと出してもらえた馬場では、見違えるような走りを見せ、一命をとりとめたそうです。

この記事から感じたことは、「頑張る」ことを、他人との比較を基準にしたりしていたら、「マリノスター」のように、ただ虚しさだけが込み上げてくるのは当たり前のことです。だからこそ、『自分は何のために頑張るのか』という永遠のテーマとしっかり向き合うことで、その必要感を自分のものにすることが大切なのではないか･･･と。

また、私が尊敬する探検家、植村直己さんは、ある時、「高い山とか、厳しい岩壁とか、山登りを優劣で見がちですが、それは違う。登った人の心に深く残るのが登山だと思うのです。誰のためでもなくて、自分のために登るんですから…」と語っていたことを思い出しました。今でも、含蓄の深い言葉だと思っています。

あと、一ヶ月で卒業・修了する子どもたち。世界中に多くの小学校が存在する中、太田小学校で過ごしたという、かけがえのない思い出をもつ子どもたちには、自分が「頑張る目標」を決め、しかも、「他との比較ではなく、自分の心に残る取り組み」をしてほしいと願っています。